平成 19 年 2 月 23 日

東　北　大　学

報　道　関　係　各　位

青葉山新キャンパスマスタープランのリーフレットについて

青葉山新キャンパス整備事業は、平成 19 年度に創立 100 周年を迎える本学が、次の 100 年に向けて国際競争力を持った世界最高水準の総合大学として、一層の飛躍と発展を遂げていくためのプロジェクトと位置づけております。

マスタープランは、青葉山の豊かな自然環境の魅力を最大限に引き出し、限られた土地を有効に活用するフレームワークや空間イメージ、交通計画などを具体化したもので、新キャンパスにおける整備の基準として示すものです。

この度、マスタープランのリーフレットが完成しましたのでお知らせいたします。

なお、本件についての記者会見等は特に予定しておりません。

本件に関する問合せ先
東北大学キャンパス移転事業室
TEL：022-217-5582

東北大学青葉山新キャンパス マスタープラン 2006

‘NEW AOBAYAMA CAMPUS’ of TOHOKU UNIVERSITY MASTER PLAN 2006

TOHOKU UNIVERSITY

はじめに

青葉山新キャンパス整備事業は、平成 19 年度に創立 100 周年を迎える本学が、次の 100 年に向けて国際競争力を持った世界最高水準の総合大学として一層の飛躍と発展を遂げていくためのプロジェクトと位置づけています。

整備にあたっては国際化への対応、既存及び新キャンパスの機能関連・機能配置などに配慮することはもとより、新たな学問領域や新技術・新産業を創出し得る教育研究環境の創造とともに、「杜の都・仙台」のシンボルとして市民に親しまれてきた青葉山の豊かな自然環境を活かした「環境調和型キャンパス」の実現を目指しています。

このことを 100 年先まで遵守して新キャンパス整備事業を進めます。

マスタープランの目的と役割

青葉山新キャンパスは、「青葉山新キャンパス基本構想（平成 14 年 3 月）」に示した 4 つの理念「まちづくりと連携するキャンパス」「自然と調和した環境調和型キャンパス」「地域との交流が広がる開かれたキャンパス」「有機的に連続した一体型統合キャンパス」の実現を目指しています。

本マスタープランは、これらに基づき、青葉山の豊かな自然環境の魅力を最大限に引き出し、限られた土地を有効に活用するフレームワークや空間イメージ、交通計画などを具体化したもので、新キャンパスにおける整備の基準として示すものです。

環境調和型キャンパスを目指して

■生態系の保全と回復：新キャンパスを含む青葉山一帯の自然生態系（水系・植生・生物）の保全と回復に努めます。

■周辺環境への配慮：新キャンパスを建設することによる周辺環境への負荷を低減し、より良い環境を創出するよう努めます。

■エネルギーの有効利用：自然エネルギーの有効利用を図り省エネルギーに努めます。

■省資源と長寿命：建設・運用・廃棄に至る資源消費を削減するとともに、再生材を積極的に活用します。また、建物の長寿命化により、社会的な資産の蓄積を図ります。

■人に優しいキャンパス：教育研究の場として相応しい安心で安全なキャンパス環境の構築を目指します。

整備フレーム

■整備区分および整備対象部局

（1）第 1 区分：跡地を財源とした移転整備
　農学研究科・農学部、電気通信研究所（原則、現有面積移転）

（2）第 2 区分：国費や外部資金による充実整備
　農学研究科・農学部※、電気通信研究所※、情報科学研究科、環境科学研究科、国際文化研究科、流体科学研究所、東北アジア研究センター、本部事務機構の一部（教育研究支援機能）、研究推進・知的財産本部等（※ 不足分の整備）

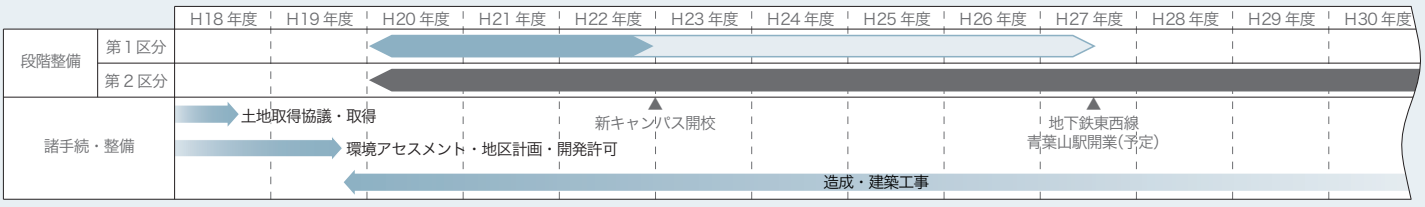
■財源とする跡地
- 雨宮キャンパス（約 9.3 ha）
- 片平キャンパスの一部（約 5.5 ha）
- その他の用地

■用地の取得
青葉山県有地を平成 1 8 年 8 月に取得
敷地面積：814,123.30 ㎡

■整備対象施設
建物面積合計約 2 0 万㎡を計画
○研究・教育施設など：建物面積　約 1 6 万㎡
　総合研究棟、図書館、福利厚生施設、実験フィールド、テニスコート、陸上競技場、多目的グラウンド、体育館など
○サイエンスパーク：建物面積　約 4 万㎡
　用地面積：約 5 ha（駐車場、緑地等を含む）
　個別研究棟建設用地：約　1,000 ㎡　1 1 区画
　　約　2,000 ㎡　4 区画
　中央研究棟　約 10,000 ㎡
　集合研究棟　約　8,000 ㎡

■想定人口
約 5,500 人を想定
○研究・教育施設など：約 4,800 人
○サイエンスパーク　：約　700 人

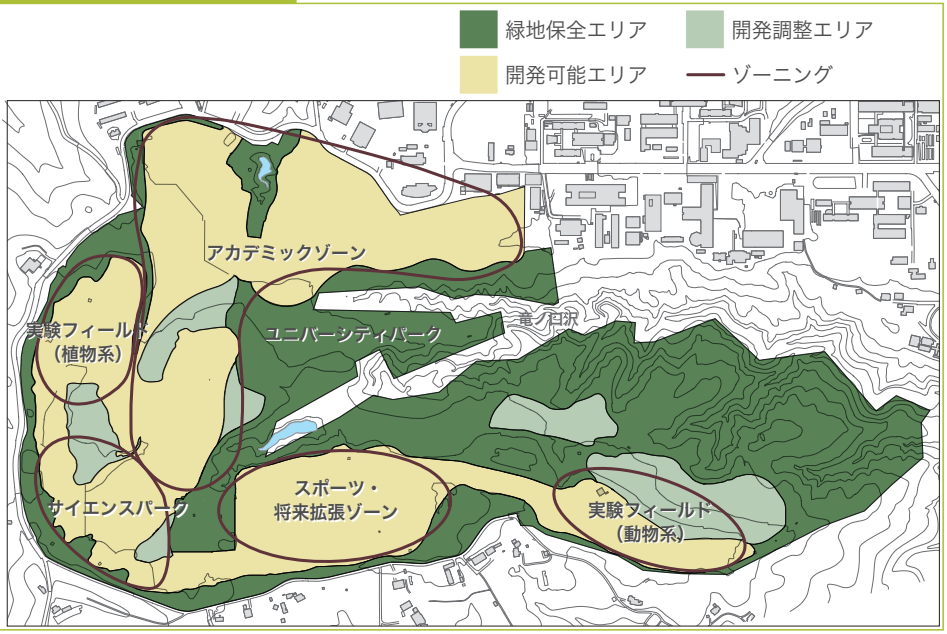
整備スケジュール



開発可能エリアとゾーニング

比較的平坦な土地形状となっている旧ゴルフ場のフェアウェイを中心に開発エリアを設定し、造成を最小限に抑えます。また、当面は開発を行わないものの、将来的な開発に慎重に対応すべきエリアとして開発調整エリアを敷地南東部およびヒルトップ周辺に設定します。

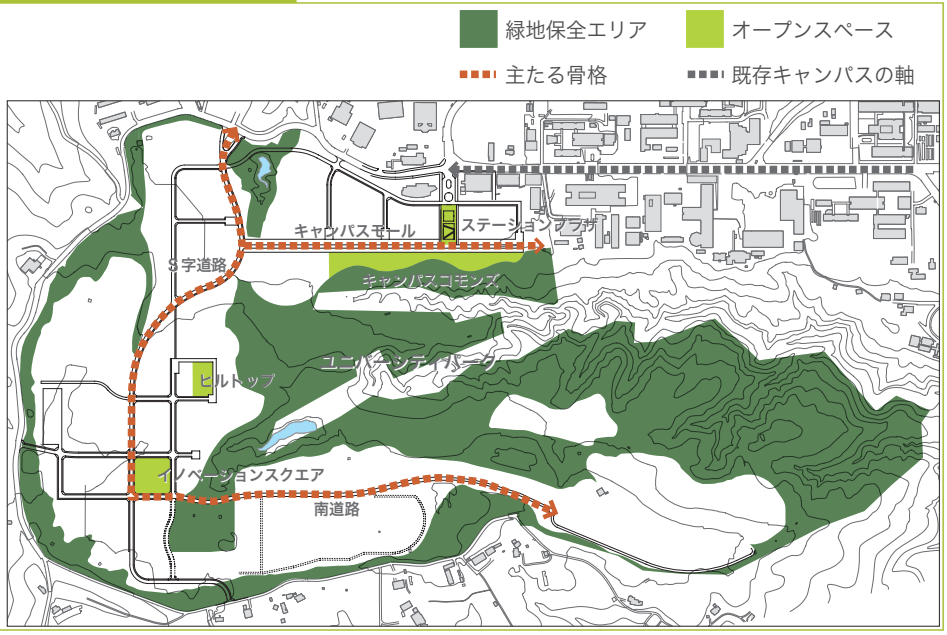
竜ノ口沢周辺の中心部は、大学のシンボルとなる市民開放型の公園をユニバーシティパークとして整備します。これを取り囲むようにアカデミックゾーン、サイエンスパーク、スポーツ・将来拡張ゾーン、実験フィールドを配置します。



キャンパスの骨格とオープンスペース

既存の青葉山キャンパスを東西に走る主要道路と平行な、新キャンパスの中心となる道路を「キャンパスモール」として位置づけます。また、自然の谷筋を活かして南北を繋ぐＳ字道路と、南道路を整備します。この骨格となる道路に直交する街路をおよそ 100mごとに計画し、適度に分節された街区を形成します。

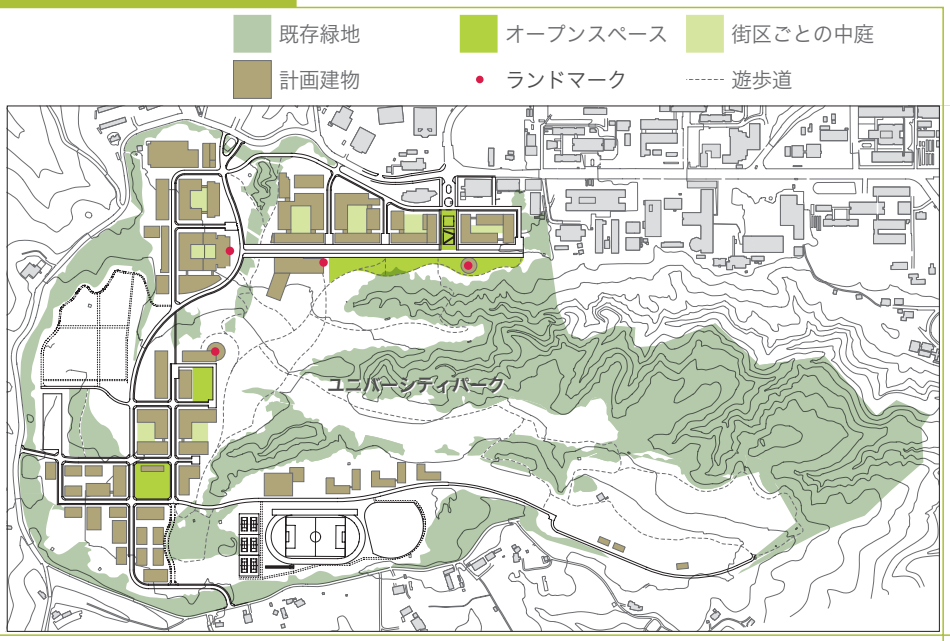
これらにより規定された空間を基に、「ステーションプラザ」「キャンパスコモンズ」「ヒルトップ」「イノベーションスクエア」など、快適な環境を創造するためのオープンスペースを各所に整備します。



施設配置方針と建設可能規模

新キャンパスの施設群は、豊かな自然環境を享受出来るよう、ユニバーシティパークを取り囲んだ配置とします。施設は４～５階を基本に、街路との親密性・一体性を持った沿道型配置の計画とし、街区ごとに中庭を設けることで、高密でありながら快適な環境を創ります。この施設配置方針に基づき、施設を配置することにより最大で 27 万㎡程度までの建設が可能となります。

また景観に変化を与えるとともに、学生・教職員の誇りと愛着の拠り所ともなる特徴あるランドマークを各所に設けます。

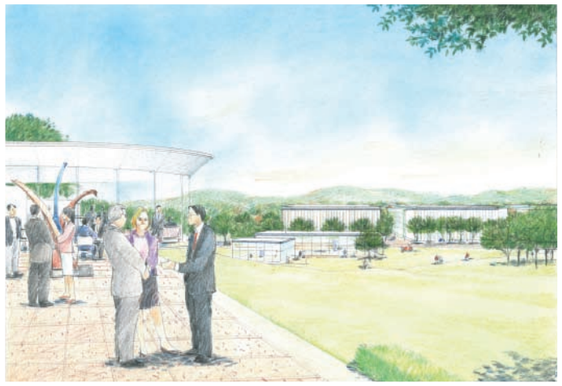


キャンパスモール

新キャンパスのメインの歩行者動線となる緑と賑わいのあふれるキャンパスライフの中心の場。
キャンパスモール沿いに配置される研究・教育施設群や図書館･講義室･食堂と一体となったオープンスペースとして整備する。

キャンパスコモンズ

ユニバーシティパークとキャンパスモールを繋ぐ芝生の空間であり、ヒルトップへの大らかな景観を眺めることができる。キャンパスモールとの境界にはベンチとして利用できるシートウォールを設け、賑わいを演出する。

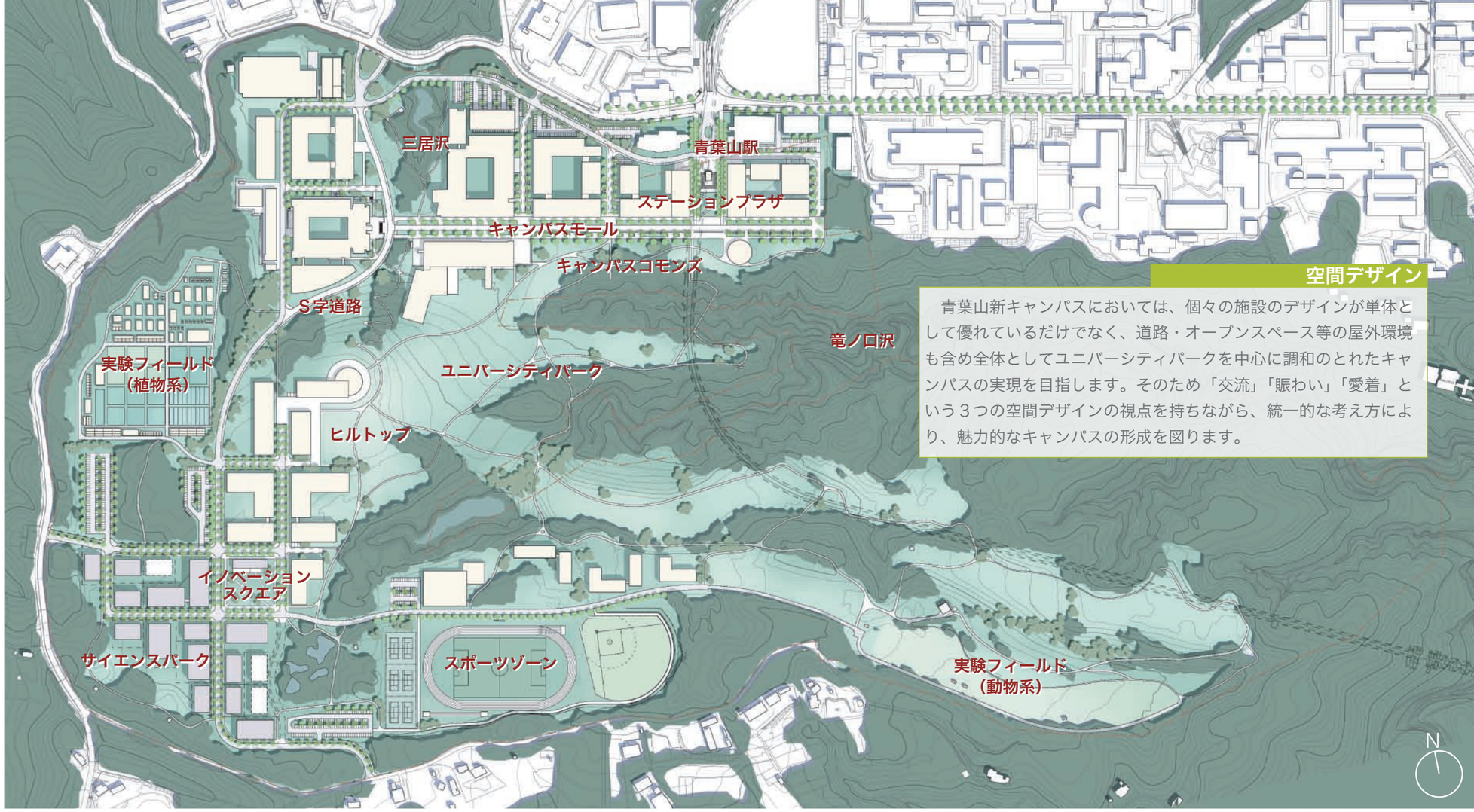


ヒルトップ

ユニバーシティパークに面した高台に位置し、キャンパスを一望できる眺望をもつオープンスペース。
新キャンパス内の各所から見える重要な場所であり、キャンパス全体のランドマークとなる建物と一体的に計画する。

S字道路

敷地の起伏を活かし、丘の裾野をぬっていく緩やかな上り勾配の道路。キャンパスモール同様、歩行者を優先した道路であり、進むにつれてユニバーシティパークからヒルトップへの眺望が変化する、豊かなシークエンスを持つ。



ここに示す計画図およびイメージは、検証のためのものであり、個別の施設の細部にわたる位置・形態・デザインを確定するものではありません

空間デザイン

青葉山新キャンパスにおいては、個々の施設のデザインが単体として優れているだけでなく、道路・オープンスペース等の屋外環境も含め全体としてユニバーシティパークを中心に調和のとれたキャンパスの実現を目指します。そのため「交流」「賑わい」「愛着」という３つの空間デザインの視点を持ちながら、統一的な考え方により、魅力的なキャンパスの形成を図ります。

ステーションプラザ

学外からの来訪者が最初にアカデミックな空間と出会う、青葉山キャンパス全体の顔となる空間。地下鉄東西線青葉山駅と一体的なデザインとし、駅を出ると目前にキャンパスコモンズと雄大なユニバーシティパークの景観が広がる。プラザに面して商業施設や全学共有施設を配置し、賑わいの場として整備する。

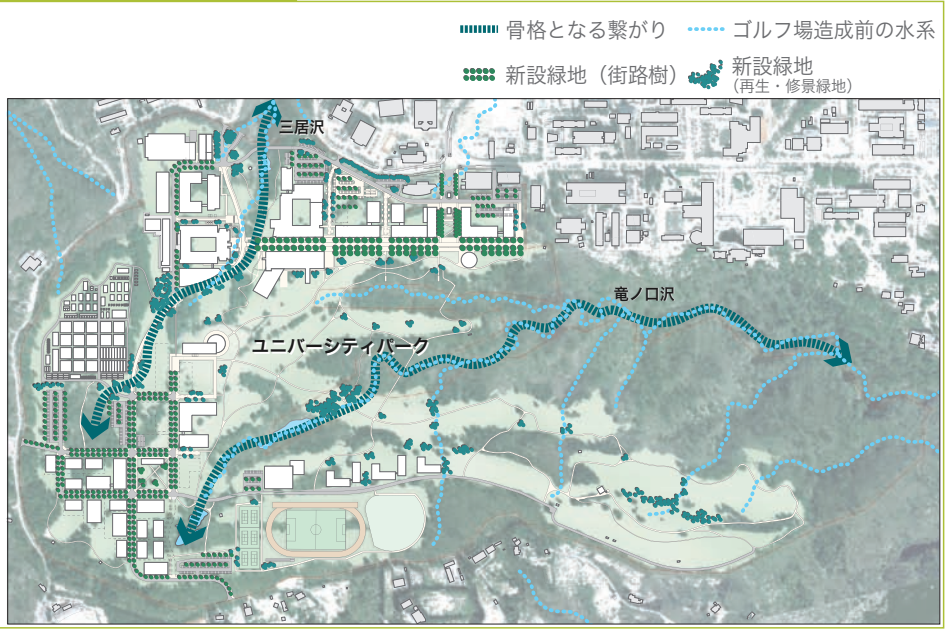
イノベーションスクエア

サイエンスパークの中央研究棟に面した、学生・教職員との産学交流の場として整備するオープンスペース。イノベーションスクエア内にはカフェテリアを設け、屋外空間と一体的に利用することで、豊かな自然環境を享受できる休憩スペースやミーティングスペースとして活用する。

水と緑のネットワーク

竜ノ口沢と三居沢の緑地を保全するとともに街路樹や補植などの緑化によって、既存の緑とのネットワークを拡充・補完します。また修景として沢筋の水みちを再生し、下流への雨水の集中緩和や生態系の保持などを図ります。

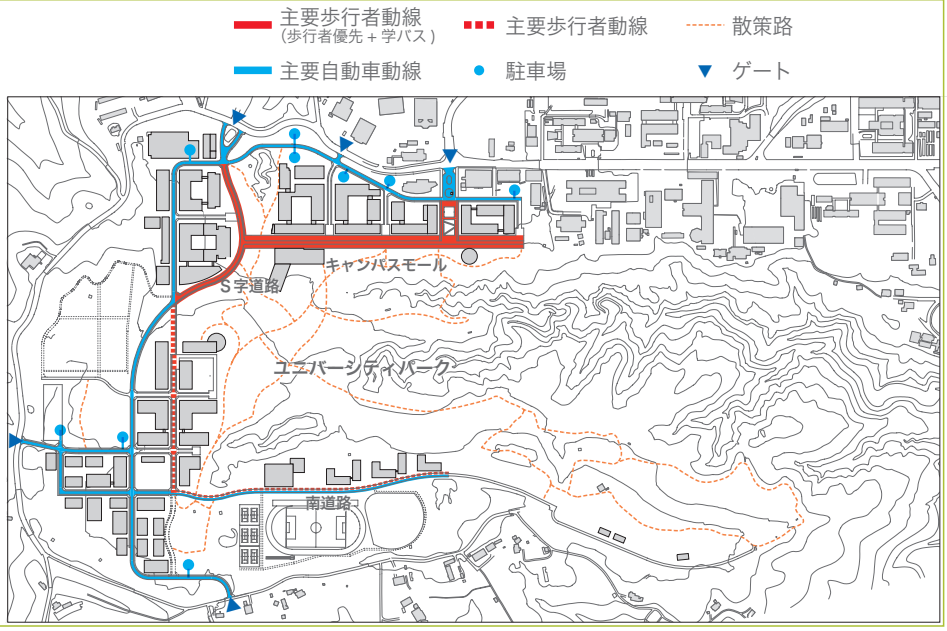
これによってユニバーシティパークを中心とした水と緑のネットワークを形成します。



交通計画

歩行者を優先した、安全かつ快適なキャンパスとします。そのためにキャンパスの骨格となる歩行者優先のキャンパスモール・S字道路と自動車の動線となるサービス道路を整備し、明確な歩車分離を行います。

さらにキャンパス内の自動車交通を極力少なくするために、駐車場をゲート付近に分散配置します。また地下鉄東西線開業後は、駐車台数を必要最小限に抑制するとともに、駐車場の有料化や学内バスの運行、割引パスの導入など公共交通利用促進のための方策を検討します。

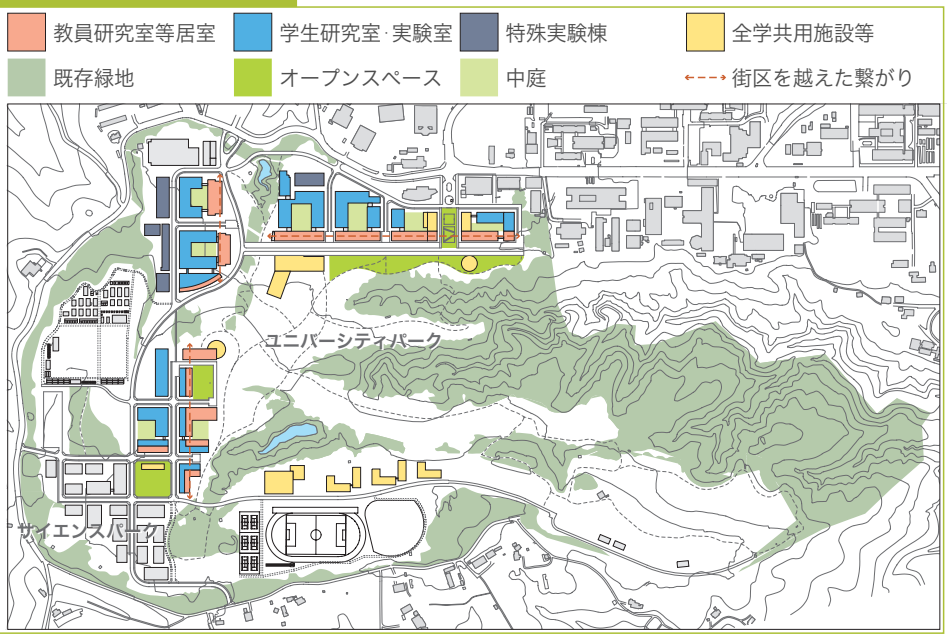


施設内機能配置計画

施設は「総合的使用・一体的管理」を原則とし、複数部局間の交流・連携を促進する「部局の枠を越えた建物配置」とします。また研究棟と実験棟を一体的に整備し、沿道型配置による高密度化を図り、将来拡張用地を適切に確保します。

教員研究室はユニバーシティパークに面して集中的に配置し、交流を促す計画とします。学生研究室・実験室は街路や中庭に面して配置し、特殊実験棟などの特殊な施設はサービス道路沿いに配置することで、利便性の向上を図ります。

全学共用施設はユニバーシティパーク内に設け、緑に溶け込んだ配置とします。



建築デザイン

大学としての風格と先進性を持ったアカデミズムを体現する建築デザインを目指すとともに、ユニバーシティパークのスケールと呼応した大らかさと、ヒューマンスケールをあわせ持ったデザインとします。また、青葉山の自然環境と調和する素材・色彩を用い、特に人の目の届く低層部には暖かみのある、年月とともに風合いを増すような素材を選定します。

これらの実現のために骨格となる建築デザインのコードを策定し、１つのキャンパスとしての統一性のあるデザインを目指します。

デザインコード

ロケーションおよび用途によって各建物のデザインをコントロールします。アカデミックゾーン内の研究・教育施設はキャンパス全体の景観のベースであり、デザインコードの適用を受ける建物とします。特に来訪者を迎えるステーションプラザに面する施設は、デザインコードを踏まえ、顔となる外観デザインを検討します。

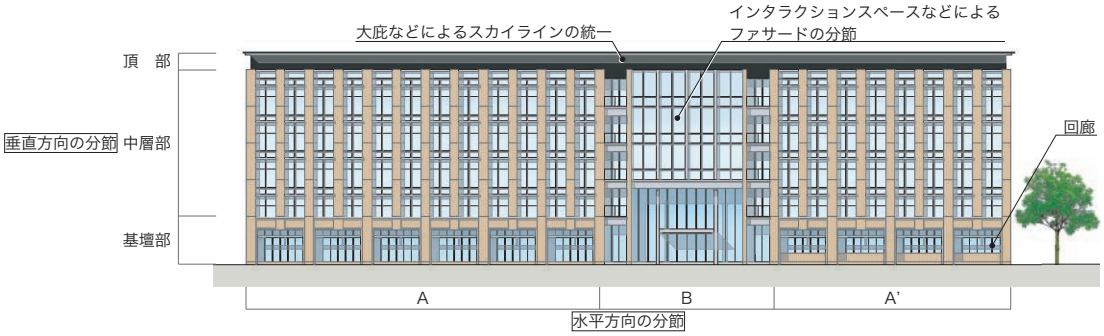
またユニバーシティパーク内に配置される全学共用施設などはキャンパス全体の景観に変化やアクセントを与える役割を持つため、デザインコードにこだわらず質の高いデザインとします。

■三層構成と分節

外壁面を基壇部･中層部･頂部の三層構成とし、分節によってヒューマンスケールな外観をつくる。基壇部は回廊形状とし、天候に左右されない歩行空間を創り、これに面して共用スペースを設け、賑わいを表出させる。頂部については、スカイラインを揃えることによって１つのまとまりをつくる。

■屋上面の景観への配慮

敷地は高低差があり、建物の屋上面が視界に入り、キャンパスの景観に大きな影響を与える。そのため、屋上への設備機器設置などについては、景観に対し十分配慮する。また、低層部分の屋上面については、屋上緑化などの検討を行う。



■縦を基調としたデザイン

キャンパスは起伏に富んでいるため、縦方向の要素の繰り返しにより連続したリズムをつくり、一体感のある外観をつくる。また壁面による圧迫感を軽減させるために、ロビーや交流スペースなどをきっかけとして、ファサードを分節する。

■素材・色彩

片平キャンパスの歴史的建造物で使用されているアースカラーのスクラッチタイルなど大学としての歴史・風格を継承する素材・色彩とする。

TOHOKU UNIVERSITY,CREATING
GLOBAL EXCELLENCE
東北大学は
世界最高水準の研究・教育を創造します

■お問い合わせ■
〒980-8577
仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学キャンパス移転事業室
Tel:022-217-5581
Fax:022-217-5584